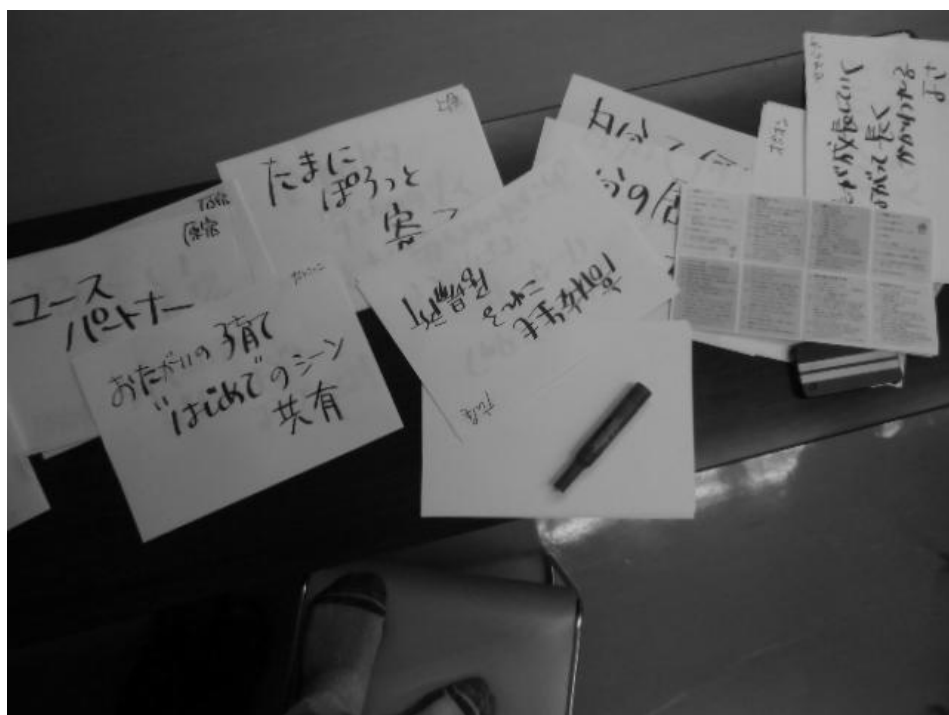


養育困難な子と 家族のネットワーク 支援事業



研修会から「理想の居場所ってどんなところ？」

平成 25 年度

独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

報告書

特定非営利活動法人 ピアサポートネットしづや

はじめに

あなたも、何かあったら声をかけてね、という仲間になってください。

平成 24(2012)年、児童虐待の摘発件数は過去最多で、中でも心理的虐待が過半数を占めたことを警察庁が発表しました。その背景には、少子化や一人親家庭の増加、地域に相談する人がいないなどがあげられます。子どもの養育に不安を感じている家庭が少なくありません。

さらに、不登校や中退者、引きこもり等の若者のなかに、思春期に表面化する発達障害等の精神疾患が放置され、ネグレクトに移行しやすいこと、また、受験の過熱の中でおこる教育虐待が、後の引きこもりにつながる場合が多いこと等があげられます。

ところが、このような心理的虐待は見えにくく、行政や、専門機関、支援機関の連携だけではよりよい支援が難しく、社会的孤立の中で起こることから、地域の多様な関わりが求められます。

ピアサポートネットしぶやは、渋谷区内で、民生委員や保護司、青少年委員、人権擁護委員等の参加を得て、中高生の居場所づくりを 15 年にわたって行ってきました。また、乳幼児の遊び場や、読み聞かせ、プレーパークを運営している団体等との連携も深めてきました。そこで、今年度は「生活圏の中に地域の多様な力を集めてネットワークで、虐待を起こさない、起こさせない取り組みを通して、支え合いが生まれるコミュニティをつくること」を目的に、当法人を中核団体と位置づけ、それぞれの団体の持ち味を生かしながら連携し役割分担をし、「養育困難な子と家族のネットワーク支援事業」に取り組みました。

特に、事業実施にあたり、3つの事業に重点をおきました。一つは、乳幼児期から 20 代までの本人とその家庭を、発達段階で途切れず、それぞれの団体等が分担して支援すること、二つ目は、家族意識や養育観が変化し孤立しがちな状況があることから「集まる場」を各地域につくること、三つ目は、子どもや家族のもとへ出向き(アウトリーチ)、寄り添うことができる若者と地域の支援員を養成することでした。

この取り組みの最中、渋谷区内にあるマンションで、同居していた仕事仲間が、口をふさぐなどの暴行で乳児が亡くなったとの報道がありました。無力さ、憤り、とても残念な気持ちになりました、悔しさがこみ上げてきました。このような悲劇が繰り返されないように、「虐待を起こさない、起こさせない渋谷のネットワーク」をさらに浸透させていきたいと考えています。

この報告書を通じて、一人でも多くの方々に、何かあったら声をかけてね、という仲間に加わっていただく契機になることを期待しています。

特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや

理事長 相川 良子

目次

はじめに	1
1. 実施事業の概要	3
1-1 「養育困難な子と家庭のネットワーク支援」事業とは	
1-2 実施体制	
1-3 中核団体及び地域連携団体等	
1-4 事業内容	
2. 事業の実施状況	6
2-1 地域人材向け地域課題研修会の実施	
2-2 ピアサポーター、ファシリテーター育成	
2-3 情報紙の発行	
2-4 モデル事業の実施	
2-5 報告会の開催	
2-6 報告書の作成	
3. 事業の評価 ～実施事業の意義と成果	13
3-1 「虐待を起こさない、起こさせない」取り組みの背景	
3-2 評価の視点	
3-3 評価の対象	
3-4 アウトリーチ活動の評価方法と評価結果	
3-5 地域サロン活動と居場所活動の評価方法と評価結果	
3-6 ホームスタート事例との比較	
3-7 まとめ	
4. 事業の成果と課題、今後の展開	27
4-1 テーマの設定理由	
4-2 事業の成果と課題	
4-3 課題解決と今後の方向性	
4-4 報告会で改めて確認できたこと	
おわりに	30



研修会 原宿ファンイン活動紹介の様子

1. 実施事業の概要

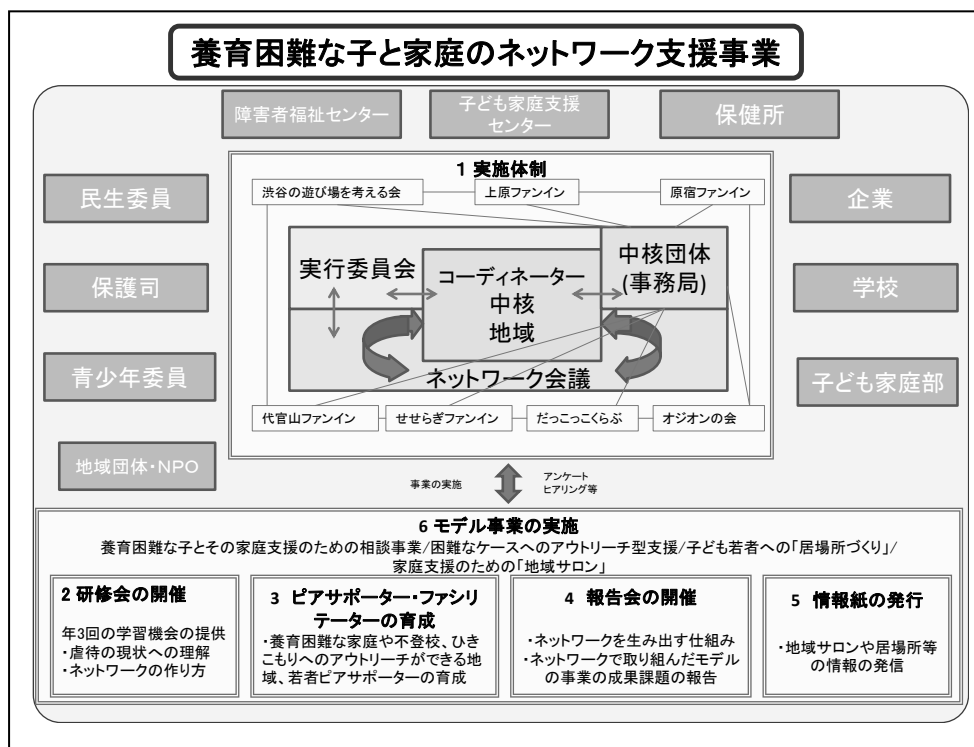
1-1 「養育困難な子と家庭のネットワーク支援」事業とは

(1)事業の目的

渋谷区内に暮らす概ね 20 代までの子ども・若者及びその家族を対象に、NPO法人ピアサポート ネットしぶやを中核団体に位置づけ、区内でつながっている 7 つの地域連携団体等の持ち味を活かし、役割を分担して、ネグレクト、心理的、身体的虐待やDV等が疑われる本人や家族に対して、「養育困難な子と家族への寄り添い」「虐待を生まない地域」づくりを目指し、虐待の未然防止を行います。

(2)実施体制

事業実施にあたって、課題の把握、整理、検討及び事業の進捗管理等を行うために、有識者で構成される「実行委員会」、地域連携団体等の代表を中心に構成する「ネットワーク会議」、事業運営で、地域人材の発掘やネットワークの広がり担当「中核及び地域コーディネーター」の 3 つの機能を設置しました。



1-2 中核団体及び地域連携団体等

(1)NPO法人 ピアサポートネットしぶや

平成 11(1999)年より地域の人材で運営されている中高生の居場所「渋谷ファンイン」を母体としています。この間の不登校の増加に伴い、ピアサポーター(ピア＝対等・仲間を表す)を配置し、区教育委員会と連携し不登校の児童生徒への家庭訪問や、居場所の提供をしてきました。2009 年に「若者の自立支援」を目的としてNPO法人認証を得ました。困難な状況を抱える子ども・若者及びその家族の孤立を防ぐ事業を行っています。

今回の事業では、中核団体として、地域コーディネーターの取りまとめ役や事務局としての役割を担いました(以下:中核NPO)。

(2)地域連携団体等

①渋谷の遊び場を考える会

代々木小公園内にある「渋谷はるのおがわプレーパーク」を中心に、冒険遊び場を提供しています。子どもが外遊びできる環境をつくり、その子どもを見守るプレーリーダーを配置して、遊びをサポートしています。

②渋谷こどもの居場所づくり実行委員会(渋谷ファンイン)

子どもの居場所づくりに取り組む地域の団体で、地域の大人やPTA、民生委員や保護司、青少年委員、人権擁護委員等が支え手となり、「たまり場」「体験活動」「クラブ活動」の3つの活動を行っています。兄弟的な存在となるユースパートナーを配置し、子どもと一緒に行動しています。今回は、渋谷区内の上原、原宿、せせらぎ、代官山の4カ所が参加しました。

③だっこっこらぶ

渋谷はるのおがわプレーパークを中心に活動を行っている乳幼児の外遊びを通じた親の会です。

④オジオンの会

渋谷区内の家庭教育学級以後の学習会メンバーを中心に、児童文学の専門家とともに幅広い領域から選んだ本を読む集まりです。

1-3 事業内容

「虐待を起こさない、起こさせない」取り組みを渋谷のネットワークで行っていくために、モデル事業を含む以下の事業を実施しました。

(1)研修会の実施

- ①地域人材向けに地域課題として、虐待の現状とネットワークの作り方について学ぶ機会を提供します。
- ②「虐待を起こさない、起こさせない」取り組みの地域への普及を図ります。

(2)ピアサポーター、ファシリテーター育成

- ①渋谷区内に暮らす概ね20代までの子ども・若者及びその家族の悩むことや不安を気軽に相談できる環境づくりと人材の育成に取り組めます。
- ②養育困難な家庭や不登校、引きこもりへのアウトリーチ(必要な場所に出向く)が出来る人材を確保します。

(3) 報告会(シンポジウム)の開催

- ① ネットワークを生み出す仕組みと、ネットワークで取り組んだモデル事業の成果と課題を公表します。
- ② 他の地域や一般市民に広く伝え普及を行います。

(4) 情報紙の発行

- ① 地域サロンや子どもの居場所等の情報をまとめ、虐待を起こさせない地域ぐるみの取り組みをアピールします。
- ② 地域の自治会関係、商店会、渋谷区福祉・教育関係機関、引きこもり等、若者支援機関に配布します。

(5) モデル事業の実施

① 養育困難な子とその家庭支援のための相談事業

- ・ 地域のつながりの中で、虐待の早期発見、早期対応が出来る体制をつくります。
- ・ 中核NPO内に相談員を置き、電話、メール、来所による相談を行います。

② 困難なケースへのアウトリーチ型支援事業

- ・ 孤立しがちな親や、引きこもりがちな子ども・若者の家庭や居場所に出向きます。
- ・ 子ども・若者と対象者と1対1で関わり伴走型の支援をします。

③ 子ども若者への「居場所づくり」事業

- ・ 地域で実施している子ども・若者の居場所やプレーパーク等に、若者ピアサポーターを配置して、虐待の予防やケアを行います。
- ・ 中核NPOのフリースペース及び連携団体5か所で、子ども・若者の居場所づくりを行います。

④ 家庭支援のための「地域サロン」事業

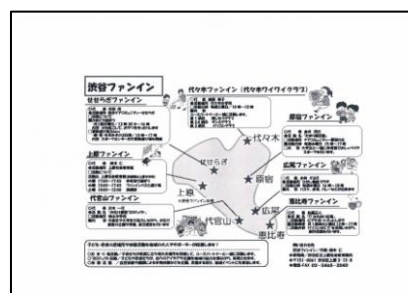
- ・ 養育に困難を感じている家庭に対して、悩みや不安を語りあう場をつくり虐待予防につなげます。
- ・ 地域連携団体7か所が活動拠点とする場所を活用し、気楽に集まれる地域サロンを行います。

(6) 報告書の作成

当該事業の成果をまとめて報告書を作成し、渋谷区、調査協力先、関係者、関係団体、他希望者へ配布します。



渋谷の遊び場を考える会(地域連携団体)



渋谷ファンイン(地域連携団体)

2. 事業の実施状況

事業を進めるなかで、事業の舵取りとなる中核NPO及び中核及び地域コーディネーターとの事業実施にかかる課題の把握、整理、検討及び事業の進捗管理、コーディネートその他事業に必要なことが多くミーティングの機会が増えました。コーディネーターミーティングには、世田谷区で先進事例として子育て支援を行い、渋谷区とも関わりが深い NPO 法人せたがや子育てネット代表松田氏に助言指導もいただきました。

2-1 研修会の実施

研修会の実施にあたり、地域の方々に関心をもってもらうために何が必要かをコーディネーターミーティングで検討しました。「虐待」そのものがわかりにくく、それぞれが持つイメージと実態とが結びつきにくいことや、発生件数は増大し、身近でも起こっている可能性がありながら、自分のこととして考えづらいこと、他の団体の方との情報交換もしたいなどの意見をもとに、現場での実践をまず聞き、事例をもとに、参加者が考えるワークを交えて、自ら何ができるかから始めることとし、3 回の研修を行いました。

(1)第 1 回(9/25) 地域で子育てを支える」とはどういうこと

講師：松田妙子氏(NPO 法人せたがや子育てネット代表)

(2)第 2 回(11/9) 私たちにできる子育て支援」について

講師：松田妙子氏(NPO 法人せたがや子育てネット代表)

(3)第 3 回(2/5) 渋谷区で今何が起こっているのかー養育困難な子と家庭の現状ー

講師：小林恵美子氏(渋谷区子ども家庭支援センター所長)

アンケートでは、「役立つ情報が得られたこと」、「他の参加者と交流・情報交換につながった」をあげていただきました。 (「とても満足」「満足」と回答いただいた方の 7 割があげています。)

【参加者からの声(抜粋)】

- ・参加者が「考える」ことをするために工夫されたグループワークが良かった。(1 回)
- ・この分野は勉強不足なので、今後もこのような勉強会の企画をお願いします。(1 回)
- ・様々な団体の活動状況を知ることができて有意義だった(2 回)
- ・各グループの活動を HP などでは知ることができると、若い方の取り込みにつながるのではないかと思います。(2 回)
- ・このネットワークが具体的にアクションになるといいなと思います。(2 回)
- ・今日の会のように、いろいろなグループが集まるとの会はとてもよかった。(2 回)
- ・虐待の事例(養育困難な子とその家族の現状)を具体的にあげていただいたので、わかりやすかった。(3 回)
- ・カプセル型家族/教育家族のなかでの子育てへの対処の方法と、貧困問題を底辺に抱える家族とではアプローチの方法が異なってくるのでは？と考えます。(3 回)

2-2 ピアサポーター、ファシリテーター育成

モデル事業で実践している3つ事業(アウトリーチ、居場所、地域サロン)のなかで、アウトリーチができる担い手を育成することを目指しました。事業を進めていくなかで、居場所や地域サロンに参加する家族への働きかけの頻度が高まりました。アウトリーチにつながる顔の見える関係づくりが行える地域サロンに参加いただいたり、活動の輪に入ってもらふことや、気軽に家族の悩みや不安を話せる環境をつくることが求められました。今回は、そのような声をいかし、地域サロンを運営することができる人材を育てることを実践しました。

初回は、導入として、参加者が考えるファシリテーター像やスキルを出し合い、情報を共有し、ファシリテーションの実践を学びました。2回目以降は、実践の場を提供し、地域連携団体で、ワークショップの設計を行い、その代表者が講師となり、ファシリテーションを経験した。また同時進行で教材づくりを行い、DVDの製作を行いました。

(1)第1回(12/18) 地域サロンを運営できる人材を育てる

講師:松田妙子氏(せたがや子育てネット代表)

(2)第2回(2/1) 渋谷か虐待を起こさない、起こさせない①

講師:山田恵氏(オジオンの会)

(3)第3回(2/27) 渋谷か虐待を起こさない、起こさせない②

講師:菱倉真理氏(上原ファンイン)

(4)第4回(3/12) 渋谷か虐待を起こさない、起こさせない③

講師:入江洋子氏(渋谷の遊び場を考える会)

注記)第3、4回は、2/8、2/15が雪のため、日程を延期して行いました。

アンケートでは、「スキルアップにつながった」、「他の参加者との交流・情報交換が図られた」をあげていただきました。(「とても満足」「満足」と回答いただいた方の7割があげています。)

【参加者からの声(抜粋)】

- ・PTA等にも所属しているが、あらためて集まって何かを考えよう、という活動を起こすことが難しい、事例があれば知りたい。(1回)
- ・実際にポストイット作戦を、高齢者向けのパソコン教室で使ってみたら、予想以上に活発にいろいろ書いていただけ、効果を感じた。(1回)
- ・この研修はよい。参加者を増やすように声かけをしたい。(2回)
- ・虐待の認識が時代によって、違うのだと知った。(2回)
- ・虐待について初めて真剣に考えることができてよかった。難しい問題だと思った(3回)
- ・考えていたことを整理できて大変有意義な時間だった。(3回)
- ・ファシリテーターの役割やコツについて知ることができました。(3回)
- ・今日の話し合いのなかで、保健所での検診を利用する企画などを具体的に話す話し合いとかできたらいいと思います。(4回)

- ・「虐待で何ができるか」とのことだったが、他の参加者から意見が聞けて、自分も話すことができた。共感できた。(4回)
- ・構成的グループエンカウンターを通じて、感情の交流ができた(4回)



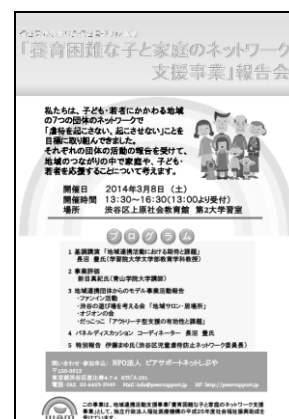
第3回研修会 講師：小林恵美子氏



第3回育成研修 講師：菱倉真理氏

2-3 報告会の開催

平成26年3月8日、報告会を開催しました。報告会では、学習院大学文学部教育学科教授長沼豊氏に、基調講演「地域連携活動における期待と課題」についてお話をいただきました。ボランティア学習の研究の立場から、災害時に見られる「ネットワーク」を例示し、「行政」「企業」「ボランティア・NPO」の各セクターの特徴長短所をあげ、地域連携ネットワークの必要性や、排除をうまない社会づくりには、コーディネーションが重要であること、心(気持ちを伝えること、ネットワークを納豆に例え、一粒(人)の存在感と糸を引く(蜘蛛の巣状))のつながりのあ



資料：報告会チラシ

る渋谷区への期待をあげていただきました。その後、青山学院大学講師新目真紀氏から事業評価、地域連携団体から、代官山ファンイン、渋谷の遊びを考える会、オジオンの会、だこっくらぶから、モデル事業の実践活動報告を行い、それぞれに登壇していただき、パネルディスカッションを行いました。アウトリーチでの声かけのヒント、アドバイスや、他団体、行政等とのつながりについて、地域コーディネーターとしての感想、今後の展開について会場からの声も交え、話し合いを行いました。参加者14名

2-4 情報紙の発行

情報紙500部を作成し、11月9日の地域人材向け地域課題研修会等で配布したところ、多くの個人、団体、行政からお声かけいただき、情報提供の協力をいただい、増刷するほどの反響がありました。



2-5 モデル事業の実績

(1) 養育困難な子とその家庭支援のための相談事業

中核NPOに相談窓口を、平日 10:00～18:00 の日時に設置し、180 回を実施しました。

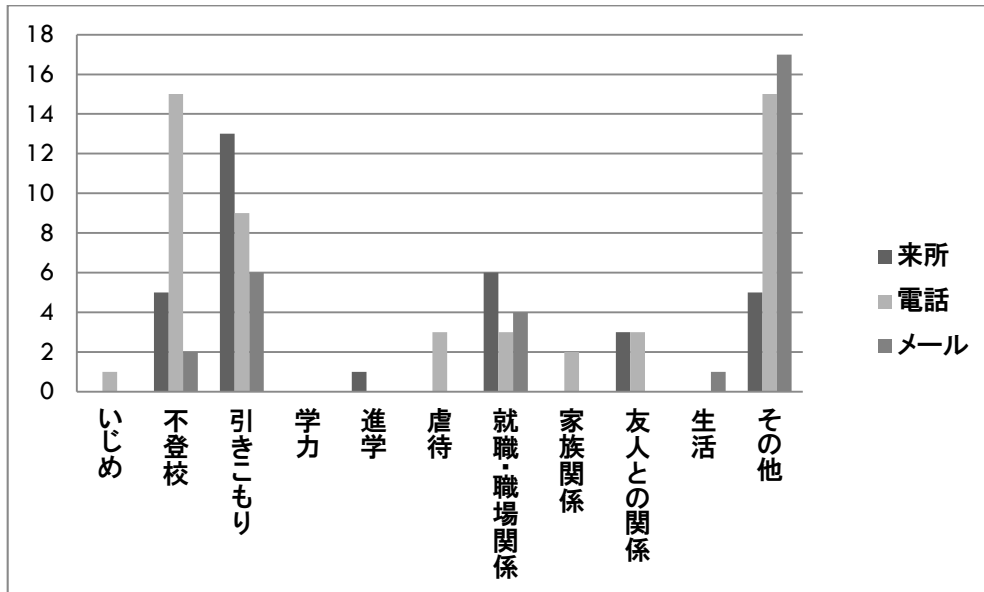
○相談件数(平成 25 年 6 月～平成 26 年 3 月)

メール相談では、対象者(本人)からの連絡が 9 割を占めますが、電話では、親御さん(特に母親)からの連絡が 9 割を占めます。来所では、初回は親御さんだけの相談ですが、次回は親子でお越しいただけ、必ずしも外出が難しい状況ではないことから、居場所につなげる場合があります。新規はメールで 10 名、電話では 20 名です。来所の 26 名は、9 割はメール・電話での相談を受けた方でした。対象者男女比は、電話、来所では 7 割が男性となっていますが、メール相談では、匿名性(本名でなくても相談可能、地域は地方別、年齢は世代別などの属性)があるためか、6 割が女性でした。対象者年齢別では、大学生世代を中心とする 20 代前半の子ども・若者とその家族からの相談が、7 割を占めています。

月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
開所 日数	18	22	18	19	22	20	20	19	19	3	180
来所	0	4	2	3	6	6	4	2	6	1	33
電話	9	9	3	5	2	7	2	6	8	1	51
メール	5	4	1	0	2	8	0	3	7	1	30
計	14	17	6	8	10	21	6	11	21	3	117

○相談内容

中学生、高校世代までは、「いじめ」、「不登校」、大学生世代までになると「引きこもり」に関する相談が増えています。その世代を過ぎると「引きこもり」「就職、職場関係」へとなっていきます。当法人の利用に関する情報提供の相談が多くなっていますが、会話を進め、事情を聞いてみると、子どもが動き出そうとしているや友だちを求めているとか、子ども・若者にこれまでとは違う変化が生じた時に連絡をいただくこと、それとは反対に親御さんが子ども・若者とのかかわりのなかで、袋小路の状態で、自らの子育てに疑心暗鬼になり、悩みや不安を語るが多くみられます。また都内の行政機関からの問い合わせがあり、対象者への紹介などを考えているという内容のこともありました。



(2) 困難なケースへのアウトリーチ型支援事業

○若者支援員の活動（103 回）

引きこもり状態であった 14～29 才までの男女のべ 7 名と自宅や居場所に出向き、1 対 1 のかわり、外出が可能であれば、付き添い、居場所等への誘導を行いました。ご家族がアウトリーチを希望されていても、活動につながらない、あるいはやむを得ず中断、中止する場合もありました。そのような場合は、主治医や関係機関と連携し、改めて本人支援の方向性を判断しました。

また相談時に、既に外出へ向けた準備が整っている場合も多く見られ、アウトリーチ型支援だけでなく、中核NPOへの誘導や直接地域連携団体の居場所へ移行し、スポーツ活動を行う場合もありました。

【活動につながらない、中断、中止する場合】

- ・本人が本支援を拒否している。
- ・障害や精神疾患などの程度が重いと疑われる。
- ・摂食障害等、心理的要因が認められる。
- ・家庭内のトラブルや虐待が疑われる。

○地域支援員の活動（116 回）

事業を進めるなかで、個々のつながりを中心とするインフォーマルネットワークでは、引きこもりがちな子ども・若者やその家族と直接接触することに限界があることが判明し、特に地域サロンを通じて、または各地域連携団体が参加しているイベントや広報、個々の日常活動のなかで、子育てや教育等の悩みを打ち明けられたなどの状況がありました。そうした状況から顔が見える関係ができていない家庭に対して、声かけを実施することとしました。対象は、主に母親となっています。他方で、中核NPOとかかわりがある渋谷区内に暮らす不登校気味の中学生とその家族を、その地域にある連携団体に協力を求め、自宅訪問を継続し行い、本人および家族支援を行った場合もありました。

(3)子ども若者への「居場所づくり」事業 (171 回)

相談、アウトリーチ型支援を行うなかで、引きこもりがちな子どもやその家族との接触はかなり難しい状態でしたが、それでも関わりをもてた家庭の子ども・若者が「友だち」や「自宅以外に過ごせる場」を求めています。居場所では、若者支援員を配置し、かねてから常設の居場所を開設している中核NPOや地域連携団体では、支援員との1対1の関係づくりや、クラブ活動や体験活動での仲間との出会いから、自信を取り戻したり、それぞれの潜在能力を発揮する機会や役割を担っていました。

当初の予定よりも回数を増やし、居場所での活動が充実していることで、様々なニーズに対応でき、より参加を促しやすい、また実際に参加している状況がうまれました。

○ピアサポートネットしゅや(91回) 14才～25才までの男女7名

若者支援員との1対1での個別面談(趣味や趣向など雑談を通した信頼関係づくり、学習支援)を通じて、虐待などで心に傷を負い将来に不安を抱える子ども・若者のサポートを行いました。居場所での多様な大人や、同世代の仲間との語らいを通じて、自らの将来について一歩踏み出していく(学習、資格、社会体験)状況も生まれました。

○渋谷の遊び場を考える会(プレーパーク) 10回 参加者 54～466名

えびすアメリカ橋プレーパークを実施し、外遊び、手作りの遊びを通じて、子どもが抱えているストレスを発散させ、夜ゆっくり休むことができるように、思いっきり遊ぶことをサポートしました。

・ここなら子どもを怒らないでいられる。大人の目を気にしないで子どもがあそんでいる。

(参加者の声より)

○渋谷子どもの居場所づくり実行委員会 70回 1,080名

各地区の特色を活かし、上原では学習室を開放し、子ども達が自由に過ごせる場を、原宿は、体育館を使用し、バスケットボールで身体を動かせる場を、せせらぎは、かまどをつかったおやつ作り、代官山は、中高生とお化け屋敷のイベントづくりを行い、子ども・若者が広く集まり、親子でも、また親元を離れて、子ども・若者だけで活動できる場も提供しました。

・上原ファンイン(上原社会教育館) 20回 参加者 145名

・原宿ファンイン(ケアコミュニティ原宿の丘) 20回 参加者 146名

・せせらぎファンイン(初台コミュニティカフェ) 20回 参加者 539名

・代官山ファンイン(鉢山中学校) 10回 参加者 250名

・初めての子には、スタッフ、若者支援員が積極的声かけをしている。(上原・振り返りより)

・積極的に小学校グループとコミュニケーションをとり、面倒見もいい。(原宿・振り返りより)

・3日間の連続講座の実施で、子ども達はいろいろな関係が広がった。(せせらぎ・振り返りより)

・大人の協力、僕たちの連帯で出来上がったサイコーのイベントでした。来年はトップリダーになって成功させたいと思った。(代官山・振り返りより)

(4)家庭支援のための「地域サロン」事業(38回開催) 参加者 468名+76組

各地域関連団体が、趣向を凝らし、講師を招き、それぞれがファシリテーターを実践しながら、悩みや不安を語り合う緩やかなつながりを生み出す場を提供しました。(抜粋にて紹介)

○渋谷の遊び場を考える会(はるのおがわプレーパーク) 5回 参加者 83 名+5 組

・第 1 回 たのしくあそんでこどもはそだつ?!

よく分からずに子どもを叱ったり、自分を責めていた。子育てをしていく上で気持ちが楽になった。
(参加者からの声より)

・第 2 回 親子で「森へ行こう」

この日をきっかけで、後日、探検隊が生まれ、再び森の中へ数組の親子が森へくり出した。
(振り返りより)

・第 3 回 親子で野菜作りにチャレンジしよう

子ども達は、すぐに飽きてしまうだろうという大人の予想に反して、すごく楽しそうに最後まで土を作っていました。(振り返りより)

・第 4 回 クリスマスツリー リースづくり

子どもと一緒に作れたのが楽しかった。…作業しながらいろいろと話せた。(参加者の声より)

・第 5 回 お餅つき

いろいろなお母さんとお話しができてよかった。初めて子どもが餅つき体験できた。
(参加者の声より)

○渋谷子どもの居場所づくり実行委員会 23 回 参加者 348 名+16 組

上原では、親子で楽しめるイベント、原宿では居場所に集う子ども達の親の会、せせらぎでは、乳幼児の親子のゴロゴロ絵本等を、代官山では、親子で地域を楽しもう！発見ミーティングを行いました。

- ・上原ファンイン(上原社会教育館) 5 回 参加者 187 名
- ・原宿ファンイン(ケアコミュニティ原宿の丘) 5 回 参加者 23 名
- ・せせらぎファンイン(初台コミュニティカフェ) 8 回 参加者 65 名+16 組
- ・代官山ファンイン(鉢山中学校) 5 回 参加者 73 名

○オジオンの会(上原社会教育館等) 5 回 参加者 37 名

- ・第 1 回(7/25)「西風のくれた鍵」を読んで
- ・第 2 回(9/26) 魔女を主人公とした作品を読む①
- ・第 3 回(10/24) 魔女を主人公とした作品を読む②
- ・第 4 回(11/28) 魔女を主人公とした作品を読む③
- ・第 5 回(1/23)「ボグ・チャイルド」を読む

主人公と同世代の子が読むと主人公の気持ちと共感する部分が多いと思う。(振り返りより)

○だっこっこらぶ(はるのおがわプレーパーク等) 5 回 参加者 55 組

・第 1 回(6/15) 乳幼児とお薬の話

お薬トークは、…小児科選びのコツなどにまで発展。日頃のちょっとした難問や悩みを発散できる良い場になった。(振り返りより)

・第 2 回(7/6) 手型・足型でアートしよう!

娘が描く作品が芸術的でびっくり! みんなにセンスを褒められて、本人も誇らしげだった。

(参加者の声より)

・第3回(9/5) 記念写真の撮り合いっこをしよう！

友だちに誘われて初めて来ました。近所にこんなプレーパークがあって羨ましい！

(参加者の声より)

・第4回(10/19) とっておきの写真でタペストリーを作ろう！

初めて来たけど、とても楽しかった！(参加者の声より)

・第5回(12/15) 0,1,2,3才児のための絵本の選び方講座

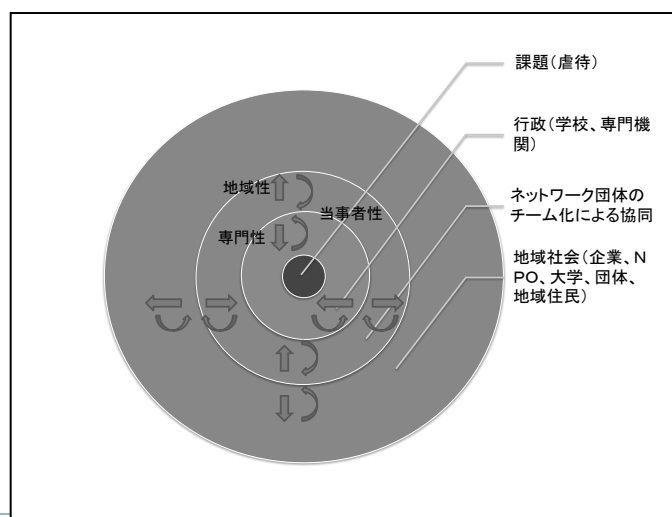
子どもがどんどんページをめくったり、本を閉じてしまうので悩んでいたが、それでも良いのだと聞いて安心した。(参加者の声より)

2-6 報告書の作成

事業の成果を取りまとめ、報告書を200部作成し、渋谷区をはじめ、事業協力先等に配布し、ホームページに公開しています。

2-7 まとめ

事業を進めていくなかで、地域連携団体の役割と地域社会との位置づけについて、以下のようなドーナツ型に示すことで、ネットワークの理解につながりました。虐待という課題を中心に置いたときにその外円には、専門性が高い行政、そのさらに外円を地域社会があります。この行政と地域社会の間に位置するのが、ネットワーク団体のチーム化による協同です。専門性を持つ行政に近づくこともできるし、そもそも地域社会の中からうまれた団体ということもあり、その地域性を発揮し、地域社会により入り込むことも可能です。アウトリーチの面では、中核NPOが行った「自宅訪問等」は、行政的な働きかけであり、地域連携団体が行った「声かけ」は、地域社会への働きかけでした。逆方向に向かう矢印は、地域サロンや居場所活動を通じて、行政や地域社会から認知された支援者として活動を行う事が出来たのだと思います。行政とも、地域社会ともつながる役割があると感じました。地域連携ネットワークの手の伸ばし方は内側にも外側のどちらにも寄ることができることになり、協同をつくるやすい存在であることが確認できました。



3. 事業の評価 ～実施事業の意義と成果

本事業は、厚生労働省が提示した「地域連携ネットワーク」にのっとり、渋谷区や地域の連携をつくりながら、乳幼児期から20代までの子ども・若者とその家族を対象に、「虐待を起こさない、起こさせない」ことに取り組んでいます。この取り組みの特徴は、地域連携ネットワークを作るために、地域コーディネーターを複数人置き、そのコーディネーターを支援する役割を中核NPO（ピアサポートネットワーク）が担った事にあります。本評価では、これらの取り組みによって、地域連携ネットワークが活性化し、地域メンバーに新たなコミュニティ意識が醸成されていたかを評価します。

3-1 「虐待を起こさない、起こさせない」取り組みの背景

厚生労働省が2005年に発表した調査結果によれば、虐待事例の6割は実の母親によるものです。虐待を生み出す背景としては、子育ての過程における母親の孤立、子育て支援者の欠如が指摘されており、地域に子育てのネットワークを作り、母親を孤立させない子育ての具体的な支援活動が期待されています。

文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課が2012年に実施した「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」の報告書に示される通り「地縁」や「血縁」等が薄れつつある現代社会においては、改めて学習活動や社会参画を通して人と人、あるいは人と地域社会がしっかりとつながり、互いに支え合いながら共生する絆ある社会を構築していくことが、社会の未来を拓くことにもつながります。しかしながら、社会の中で自らの位置づけを自覚し、自身の持つ能力や経験を社会や他者のために活かす方法については、わからないという人が少なくありません。

地域のネットワークで虐待を起こさない、起こさせないネットワークを構築していくためには、ネットワークに参加する多様な参加者が、主体的に関われる仕組みが必要になります。モデル事業ではこれまで個々に活動していた地域団体を、「虐待を起こさない、起こさせない」という目標のために、ネットワーク化していくことを目的にしています。本評価では、この取り組みの実践結果を、虐待予防型のアウトリーチ活動で成功しているホームスタート事例と比較し、本取り組みとの共通点、相違点を明らかにするとともに、今後の課題を明らかにすることを目的としています。

3-2 評価の視点

まず、実施体制における地域連携ネットワークを作るために、配置した地域コーディネーターと、そのコーディネーターを支援する役割を担った中核NPOおよび中核コーディネーターについて、「コミュニティを問い直す つながり・都市・日本社会の未来」（2009年 ちくま新書）の著者の広井良典氏は、コミュニティとは、人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団と定義しています。その考え方に基づけば、地域コミュニティが衰退した状態は、地域との関わりが減り、ある種の情緒的（ないし非言語的）なつながりの感覚が薄れた状態と考えられます。またPutnamは、コミュニティを「結合型」と「橋渡し型」に分けて説明しています（図1）。「結合型」は、組織の内部における人と人との同質的な結びつきを意味し、内部での信頼や協力関係、強力な絆を生むものであるのに対し、「橋渡し型」は、異なる

組織間における異質な人や組織を結び付けるネットワークであると位置付けています。

今回の実施体制のなかで、地域コーディネーターミーティングは、本事業中、全5回開催され、ネットワーク会議は全2回実施されました。ネットワーク会議参加者へのインタビューから、これらの会議で共有された情報が、各団体にフィードバックされ、情報紙作成という共通の目標を持ち、ネットワークの深まりにつながっていったと考えられます。また、活動期間中に、行政団体や、地域の企業（サッポロビールグループ等）、子ども家庭支援センターと様々団体とのつながりが出来ていることから、本事業の活動がネットワークの結束だけでなく広がりにも貢献していることがわかります。

事業評価では、結束型のコミュニティが地域コーディネーターと中核NPOによって、地域全体として「虐待を起こさない、起こさせない」意識を生成できたかを評価しています。

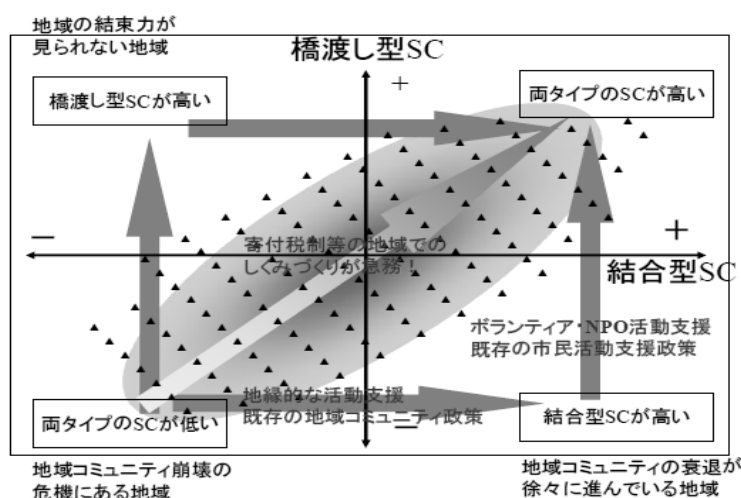


図1 2つのタイプのネットワーク化（JICA 資料より抜粋）

次にモデル事業では、アウトリーチ、居場所、地域サロンの活動記録の対象者の特徴と時系列での変化を整理するとともに、自己効力感の形成支援という観点から検討します。自己効力感とは社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念の1つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指します。ある問題や課題に対し自己効力感をどの程度もっているかによって、個人の行動の変容を予測し、不適応な情動反応や行動を変化させることが指摘されています。活動記録の記載に、参加者の自己効力感に関する変化が見られるかを質的に分析し、変化が起きた際の、関係者の介入方法を明らかにすることを目的とします。

自己効力感には二つの水準があることが知られています。一つは臨床・教育場面における研究でよく用いられている課題や場面に特異的な行動に影響を及ぼす自己効力感です。もう一つは、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感です。後者の観点では、自己効力感をある種の人格的特性的な認知傾向とみなすことが可能なため、特性的自己効力感と呼びます。本調査では、アウトリーチ活動と居場所、サロン活動を連携させることで、参加者が活動を拡張的に捉えることができ、自身が担う活動の自己効力感が高まると考えます。また自己効力感が高まった状態では、

- 1.他の団体の活動が見え
- 2.連携していることで安心感がもてる

ようになることが期待されます。

3-3 評価の対象

虐待等によりひきこもりがちな状態にある対象者とその家族は、参加しているコミュニティが異なると考えられます。青少年期にあるものは、学校教育・社会教育を通じて、様々な学習を積み重ね、多くの人との出会いを通して、社会に巣立つまでの間に、成人としての素地を築いていきます。この時期は、特に、子どもたちが、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し問題解決できる能力を養う場が重要になります。一方家族は、仕事中心の「タテ社会」の生活と、地域社会中心のいわば「ヨコ社会」の生活を経験しています。この世代の地域に対する認識は、若い時期からの働き方や家族や地域との関わり方、能力開発、生活習慣等の蓄積に負う面が大きく、これまで地域との関わりを持たなかった者については、役職や肩書きによらない対等なコミュニケーションを体験する場が必要になります。

モデル事業(ピアサポートネットしづやの取り組み)は、大別すると三つの活動からなっています。一つ目は、虐待等によりひきこもりがちな状態にある対象者に対するアウトリーチ的なネットワーク構築活動と対象者を抱える家族に向けたアウトリーチ的なネットワーク構築活動。二つ目がアウトリーチで芽生えた関わりを次のステップにつなげていく被支援者のための居場所活動と被支援者の家族向けのサロン活動。三つ目が、これらの2つの活動をつなげていく活動になります。

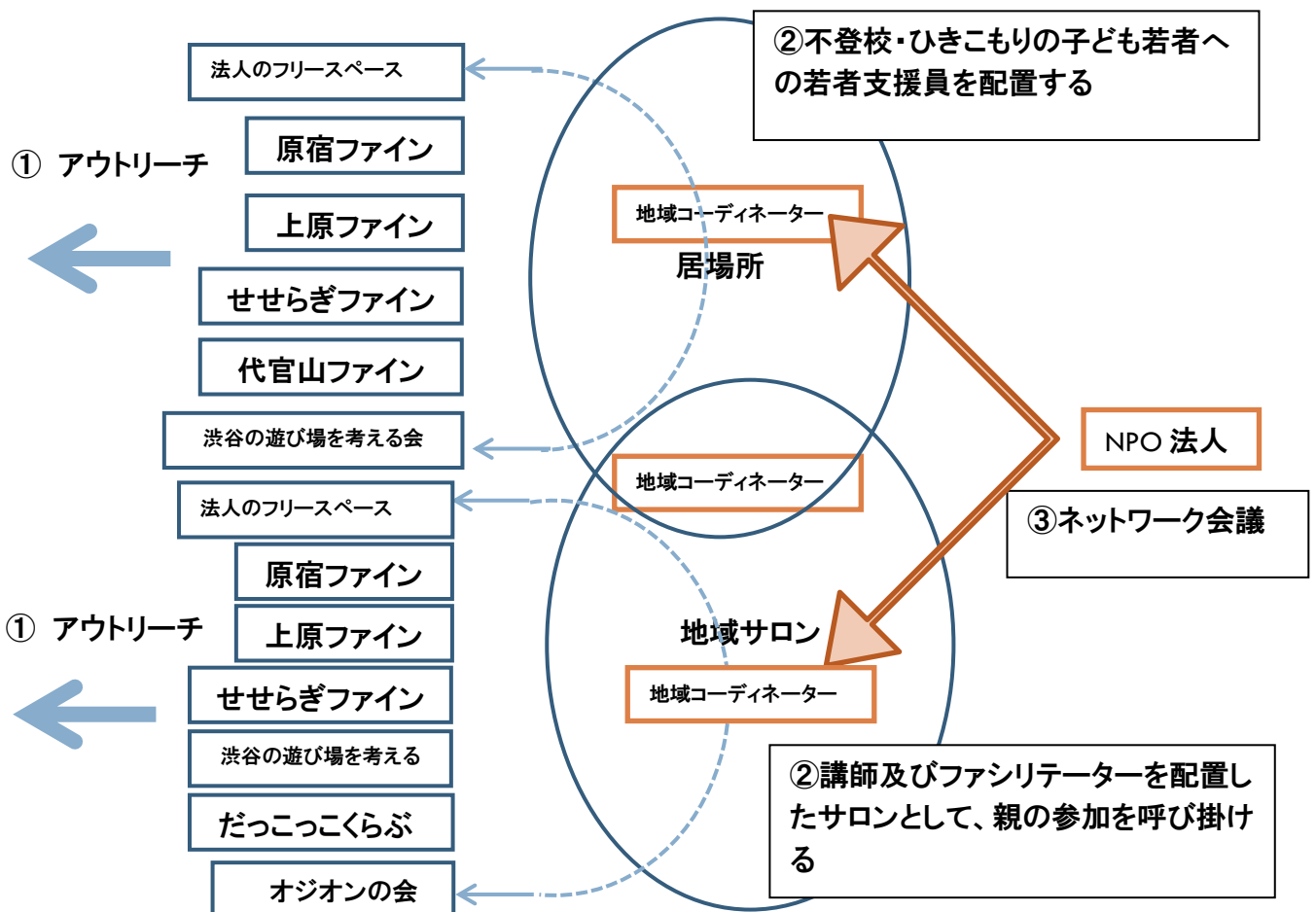


図2 評価の対象

3-4 アウトリーチ活動の評価方法と評価結果

本評価では、2 月末までに提出されたアウトリーチ活動 20 枚の記録をもとに評価を行います。活動記録には、実施日、実施場所、対象者の性別、およその年齢、相談内容、相談のきっかけ等が記載されています（アウトリーチ報告書参照）。

アウトリーチ報告書				
担当者	[REDACTED]			
実施日	① 2013年4月20日 ② 6月15日 ③ 7月13日 ④ 9月21日 ⑤ 12月7日			
場所	下エヒル			
相談者	性別	男・女	およその年齢	30 代
相談内容	① 子どものアレルギーが強く、食事制限が厳しく大変。 母親も手をつけているが食事制限が厳しくストレスである。 ② 食事のことで「鬼」に困っている。アレルギーがあるのに、 子供が食べられない。 母親（子の祖母）の子どもとの付き合いにストレスを感じている。 ③ 1才を過ぎて、アレルギーが落ち着いてきた。食事制限が厳しく、 少しづつはなってきた。 ④ 女児は食べ物を好まないでいて、女児は食べ物を好まない。 気に入らないと、噛みついてくる。 ⑤ 食事量が多い食べ物のため、時々かんしゃくを起すことがある。そうすると 手がつけられない。1歳5ヶ月の女児が食べ物を好まない。			
相談のきっかけ	同月齢の子どものお母さん、母親が食事の不安で悩んでいて、 その不安、子供でセミナーでも参加し、会う度に話を聞かせる。 互いの手が少なく、相談がきっかけ。			
アドバイス	シンガポールというところあり、シンガポールは食文化が日本人に近いが、 食事面で苦労しているが、シンガポールのお子さんとの交流機会にも なる可能性がある。自分自身の子と母親が近く、子供が食べ物を好まない ではないか、思っていることを耳を聞いてあげること、気遣いすることは重要 としている。			
備考				

アウトリーチ活動報告書は、中核NPOを行った若者支援員と地域連携団体の地域支援員が必要な場所に出向き実施した活動が記録されています。2 月末までに提出された活動記録を整理した結果、アウトリーチの総数は 72 回あり、そのうち男性への声掛けは 1 件のみでした。（その後提出を受けたアウトリーチ活動報告書では、中核NPOが地域連携団体の協力を得て、地域に暮らす不登校気味の中学生の家庭への定期訪問による本人および家庭支援を行い、男性 16 件分が追加されています。）

表 1 アウトリーチ活動の対象者と支援場所

担当者	回数	実施日	対象	支援場所
A氏	12回	2013年6/8、15(2回)、 7/13、9/7、21、10/18、 12/7 2014年1/10、11(2回)、 20	女性 30代12件	代々木至誠こども園、渋谷はる のおがわプレパーク、渋谷区内 路上、下北沢、カフェ、喫茶店
B氏	7回	2013年7/30、10/1、 10/25、11/20、12/10、 1/17 2014年1/30	女性 40代3件 30代4件	代々木5丁目、路上、小田急 線の中、代々木5丁目、路上
C氏	3回	2013年9/7、11、19	女性 30代2件 20代1件	初台 緑道公園、参寓橋公 園、西原スポーツセンター、幼 児体育室
D氏	3回	2013年12/10、 2014年1/8、1/23	女性 50代2件 40代1件	初台駅前、路上、飲食店内、 参寓橋
F氏	3回	2013年9/12、12/14 2014年1/30	女性 60代1件 30代2件	飲食店内、渋谷、代々木公園
G氏	2回	2013年12/16、 2014年1/14	女性 20代1件 30代1件	自宅近くの路上
H氏	2回	2013年10/12、 2014年2/26	女性 50代2件	渋谷カフェ、渋谷駅前路上
I氏	3回	2014年1/5、1/8、2/16	女性 30代2件 男性 30代1件	自宅、相談者の自宅
J氏	2回	2013年12月 2014年1月、2/10	女性 40代2件 50代1件	公園、代々木、山手通り、Pet okの喫茶店
K氏	2回	2013年12/1、12/15	女性 40代1件 30代1件	せせらぎ冒険遊び場
M氏	8回	2013年1/31 2014年2/23	女性 40代4件 30代2件	仲通り商店街、総合ケアコミュ ニティせせらぎ、上原社会教育 館、電話

			? 3 件 70 代 1 件	
N 氏	17 回	2013 年 7/13、15、20、 21、22、9/8、14、10/10、 11、12、19、11/2、3、15、 16 2014 年 1/25、26	女性 40 代 3 件 30 代 10 件 10 代 3 件 60 代 1 件	プレパーク、ガールスカウトバス ハイクのバスの中、ガールスカ ウト集会所、渋谷区民フェステ ィバル会場、かけづか祭り
O 氏	8 回	2014 年 3/25、26	女性 40 代 3 件 30 代 5 件	上原社会教育館
合計	72 回		72 件	

アウトリーチ先を年代別に見たのが、図 3 です。30 代が突出していることから、30 代の女性に対しては比較的アウトリーチ的な活動がしやすかったのではないかと考えられます。

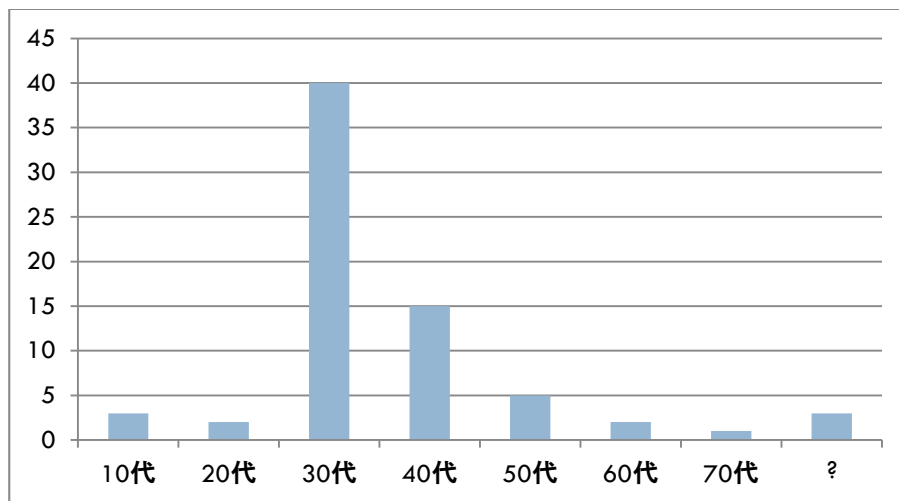


図 3 アウトリーチ対象の年代分布

アウトリーチ活動の件数を時系列でまとめたのが図 4 です。事業前半では、まばらであったのが、ネットワーク会議を開催し出した 12 月から活動が増えだすことがわかります。またアウトリーチの対象も 12 月以降から広がりを見せています。

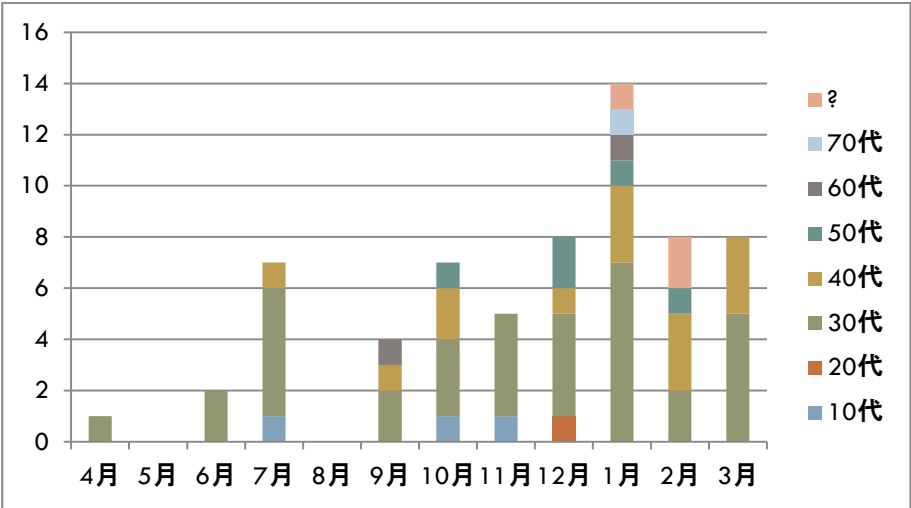


図 4 アウトリーチ活動の時系列での推移

3-5 サロン活動と居場所活動の評価方法と評価結果

本評価では、1 月末までに提出されたサロン活動 7 枚の記録と居場所活動の記録 10 件をもとに評価を行いました。活動記録には、実施日、実施場所、実施内容、参加者人数、初めて来た人数、初めて来た人がサロンや居場所を知ったきっかけ等が記載されています(報告書参照)。

居場所活動の報告書		地域サロン企画書	
団体担当者(上原ファンイン 代表 鈴木 仁)		団体担当者(上原ファンイン 代表 鈴木 仁)	
実施日(2014年1月21日)		企画書作成日(2014年2月10日)	
実施日	2014年1月21日	実施予定日	2014年3月2日
場所	渋谷区立上原社会教育館 体育室	場所	渋谷区立上原社会教育館 体育室
実施内容	ボール等を使っての自由遊びをしながら、色々なおしゃべりや交流をする。	実施内容	コーンを使った迷路
参加者人数	6名	対象者	幼児から小学生までとその保護者
参加者の声	・以前スタッフをしていた梅原真穂さんが来てくれて、とても嬉しい。	講師	鈴木 仁
初めて来た人の人数	1名	スタッフ	ファシリテーター 紺野 遼子 サポーター 菱倉 真理
初めて来た人が居場所を知ったきっかけ	1. 地域サロンに参加したから 2. ナラシを見て 3. 知り合いの紹介 4. その他()	内容	道路工事などで使うコーンを体育室に並べて行き止まり等を作って迷路とする。プラスチックで出来たコーンは、倒してもぶつかっても安全で、幼児でも安心して遊べる。幼児や小学校低学年が保護者と一緒に遊びに来、子どもは子どもで楽しく遊び、保護者はスタッフや保護者同士でいろいろおしゃべり出来る場を作る。
初めて来た人の参加目的	友達と一緒に遊びたい。	企画の背景	・2013年7月に同様の企画を恵比寿地域で行ったところ、多くの親子が遊びに来て大好評だった。またやりたい、という声が上がった。今回上原でも実施する事にした。
初めて来た人へのその後のフォロー	初めてだと思われる子どもには、スタッフ、ユースパートナーが積極的に声を掛けている。特に問題が無い限りは、帰宅後にあらためてフォローすることはしていない。	告知方法	・近隣の小学校と幼稚園にチラシを配布する。 (上原小学校 喜谷小学校 岸辺幼稚園 シオン幼稚園を予定)
振り返り	・以前スタッフをしていた梅ちゃん(梅原さん)が来てくれて子ども達は大喜び。ドッチボールをしたり、おしゃべりをして楽しんでいた。身近でやさしいお姉さんの存在は、子ども達にとってとても大きいと感じた。		
備考	・安全管理指導員 熊倉健詞 ・ユースパートナー 石田祥		

図 5 居場所活動記録とサロン活動記録

居場所活動報告書は、各連携団体(7 団体)が年間に 10 回実施した活動が記録されています。サロン活動報告書には、各連携団体(7 団体)が年間に 5 回実施した活動が記録されています。1 月末までに提出された活動記録を整理した結果、居場所を知ったきっかけは、31 件中 28 件が知り合いの紹介によるものを挙げています。報告書の振り返りの中にも、声かけの重要性が指摘されていることから、意識的にネットワーク化を支援することの重要性がわかります。一方で、チラシや地域サロンに参加して居場所活動を知ったという報告が見られるのは、10 月以降であることから、ネットワーク化の効果が数字に現れるまでには、活動を始めて半年間程度は必要であると考えられます。

表 2 居場所活動の参加者の推移

担当団体	実施日	場所	参加人数	居場所を知ったきっかけ
渋谷の遊び場を考える会(10 回)	2013 年 7 月 2 日	恵比寿ガーデンプレイス、加計塚小学校、アイリス	6 名 1 名(初)	メンバーの紹介
	2013 年 7 月 21 日	恵比寿南一公園	約 6～70 人 約 30(初)	チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2013 年 7 月 22 日	恵比寿南一公園	約 5～60 人 約 30(初)	チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2013 年 10 月 2 日	恵比寿ガーデンプレイス、加計塚小学校、アイリス	5 名 0 名(初)	地域サロンに参加したから、チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2013 年 10 月 10 日	恵比寿南一公園	約 5～60 人 約 30(初)	地域サロンに参加したから、チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2013 年 10 月 11 日	恵比寿南一公園	約 5～60 人 約 20(初)	チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2013 年 10 月 12 日	恵比寿南一公園	約 6～70 人 約 30(初)	地域サロンに参加したから、チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2014 年 1 月 16 日	恵比寿ガーデンプレイス、加計塚小学校、アイリス	約 5 人 約 0(初)	
	2014 年 1 月 25 日	恵比寿南一公園	約 6～70 人 約 30(初)	チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった
	2014 年 1 月 26 日	恵比寿南一公園	約 5～60 人 約 30(初)	チラシを見て、知り合いの紹介、たまたま通りかかった

上原ファン イン (10 回)	2013 年 10 月 23 日	上原社教館 体育館	13 名 0 名(初)	知り合いの紹介
	2013 年 10 月 29 日	上原社教館 体育館	7 名 2 名(初)	知り合いの紹介
	2013 年 10 月 30 日	上原社教館 体育館	5 名 1 名(初)	知り合いの紹介
	2013 年 11 月 6 日	上原社教館 体育館	5 名 0 名	知り合いの紹介
	2013 年 11 月 19 日	上原社教館 体育館	7 名 2 名	知り合いの紹介
	2013 年 11 月 27 日	上原社教館 体育館	6 名 0 名	知り合いの紹介
	2013 年 12 月 3 日	上原社教館 体育館	5 名 0 名	知り合いの紹介
	2013 年 12 月 17 日	上原社教館 体育館	4 名 2 名(初)	知り合いの紹介
	2014 年 1 月 21 日	上原社教館 体育館	6 名 1 名(初)	知り合いの紹介
	2014 年 1 月 22 日	上原社教館 体育館	3 名 1 名(初)	知り合いの紹介
合計 (20 回)			110～521 名	

1 月末までに提出されたサロン活動を分析すると、活動が開始されたのは、10 月以降が多い結果となりました。活動記録の分析から、サロン活動をするにあたって、事前に何度も団体内で話し合いの場が持たれており、試行錯誤しながら活動に至っていることがわかります。活動記録から本事業の期間中にサロン活動と居場所活動やアウトリーチ活動との相乗的な効果までは検証することができませんでした。しかしながら、居場所のイベントに参加した連携団体の活動に参加していた複数のサポーターやコーディネーターへのインタビューから、居場所にきた参加者にサロン活動を案内したり、参加を促したりしていたことが明らかになりました。こうした活動は、サポーターやコーディネーターが自発的に行っていることから、時間の推移とともに、連携に向けた意識が醸成されていたと考えられます。

表 3 サロン活動の参加者の推移

担当団体	実施日	テーマ	参加人数	PR 方法
上原ファイン (5 回)	2013 年 12 月 25 日	クリスマス会	大人 3 名 子ども 7 名	近隣幼稚園・小学校
	2014 年 1 月 29 日	バレンタインお菓子作り	大人 2 名 子ども 7 名	近隣幼稚園・小学校
	2014 年 2 月 25 日	ママのためのストレッチ教室	6 名	近隣小学校
	2014 年 3 月 1 日	絵手紙教室	82 名	近隣小学校
	2014 年 3 月 2 日	コーンを使った迷路	80 名	近隣小学校
オジオンの会 (5 回)	2014 年 1 月 23 日	ホグ・チャイルドを読む	8 名	チラシ配布
	2013 年 7 月 25 日	西風のくれた鍵を読んで	8 名	チラシ配布
	2013 年 9 月 26 日	魔女を主人公とした作品を読む①	8 名	チラシ配布
	2013 年 10 月 24 日	魔女を主人公とした作品を読む②	5 名	チラシ配布
	2013 年 11 月 28 日	魔女を主人公とした作品を読む③	8 名	チラシ配布
だっこっこ くらぶ(5 回)	2013 年 6 月 15 日	乳幼児とお薬の話	6 組	チラシ配布
	2013 年 7 月 6 日	手型・足型でアートしよう！	8 組＋遊びに来ていた大きい子どもたち	チラシ配布
	2013 年 9 月 7 日	記念写真の撮りあっこをしよう！	15 組	チラシ配布
	2013 年 10 月 19 日	とっておきの写真でタピストリーを作ろう！	16 組	チラシ配布
	2013 年 12 月 14 日	0,1,2,3 歳児のための絵本の選び方講座	10 組	チラシ配布
合計(15回)			73 名+49 組	

3-6 ホームスタート事例との比較

ホームスタートとは、6歳以下の子どもがいる家庭にボランティアが訪問する、イギリスで始まった「家庭訪問型子育て支援」です。日本でも2006年に大正大学西郷泰之教授が代表となり、ホームスタート活動を展開しています。

ホームスタートのホームページによると、ホームスタート活動の特徴は、1)待つ支援(拠点型)ではなく届ける支援(訪問型)であること、2)虐待などが発生してから対処する事後対応ではなく発生を一手手前で予防する事前の支援であること、3)専門家による指導ではなく、子育て経験のあるボランティアによるフレンドシップを重視した支援であること、4)支援を受けた親が自信を取り戻す活動であること、5)利害関係のない無償のボランティアによる支援であること、6)有給のオーガナイザーがボランティアを養成する仕組みや、利用家庭のニーズを把握し効果を評価するシステムがあり、支援の「質」を保証する活動であること、が挙げられています。

2014年2月5日に公開された、訪問活動に関する集計年比較では、ホームスタートの利用者数、訪問回数が年々増加していることが分かります(図6,7)。またホームスタートを利用している家庭の1,174件中、6ヵ月未満の子どもがいる家庭の割合は34%、1歳未満の子どものいる家庭が51%となっています。ホームスタートが対象にしているのは6歳以下の子どもですが、実際に利用しているのは、より小さな子どもであることがわかります。

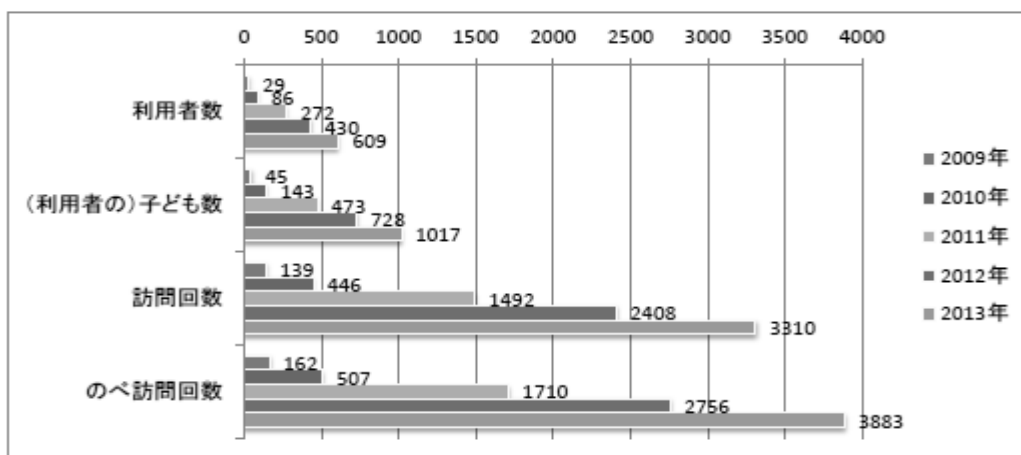


図6 ホームスタートの利用者数

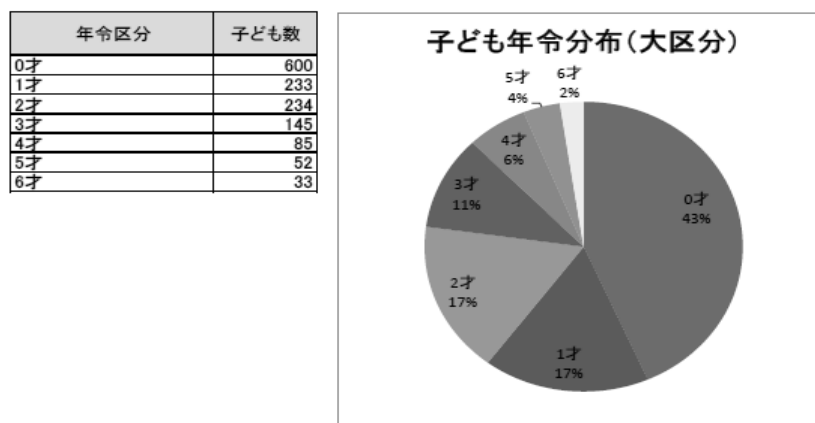


図7 ホームスタートの子ども年齢の分布

本事業に参加したコーディネーターやサポーターの話では、活動に参加する人数が少なく、アウトリーチをするといっても、具体的にどこで何をしたらいいのか戸惑うという声が多数聞かれました。ホームスタートのような乳幼児期を対象としたアウトリーチ活動は、保健センター経由で比較的情報が届きやすいと考えられます。しかしながら、本事業で乳幼児から二十歳までと幅広い年齢を対象としており、一般的に年齢が高い程、問題が深刻化している家庭が多いと認識されています。こうした認識が、参加者のアウトリーチ活動を困難なものにしていると予想されます。乳幼児に対するアウトリーチ活動は、本事業においても実施されましたが、参加者数は他の層に比べると比較的多い結果でした。このことから参加者が持つ意識の壁を考慮する必要性が確認されます。

更に、本事業においては、社会参加する層の薄さも確認されました。社会保障改革に関する有識者検討会報告(2010 年 12 月)においては「活力ある中間所得層の再生」として「ふつうに努力すれば、誰もが家族をつくり、生活できる社会を取り戻すべきである。これまでの日本で、分厚い中間所得層の存在こそが、安定した成長と活力の源であった。社会保障の機能強化によって、中間層の疲弊に対処し、その活力を再生できれば、それは自ずと経済成長と財政の安定につながる。」といった指摘もなされています。サロン活動の記録から近隣小中学校に、ちらしを配布しても興味を持つものは少なく、実際にサロンに参加するものは更に少ない状況です。サロンに来ているのは、虐待を起こしそうな親ではなく、むしろ社会参加を積極的に行う意識の高い層と考えられます。

本事業においては、アウトリーチ活動から、虐待を起こしそうな親をサロンへ誘導することを想定していたが、ホームスタート事業と比較した本事業の性格から、むしろ、ネットワーク機能を強化するような取り組みの必要性が認識されました。またネットワーク機能を強化する上では、コーディネーターの資質が問われ、コーディネートを継続して育成できる仕組み作りが今後の課題になると考えます。

3-7 まとめ

本事業において、ネットワークが効果的に形成され、時間の経過とともに、参加者の安心や信頼が形成されていることが確認できました。ホームスタート事業との比較から、本事業(乳幼児期から 20 代までの子ども・若者)は、参加者の認識を育成するのが、乳幼児より困難である可能性が確認されました。今後本事業を継続するにあたって、参加者の認識を育成する上では、以下 2 点が課題になると考えます。

1. ネットワーク機能の強化

コーディネーターがより動きやすくなるようなネットワーク機能の強化が必要。

2. コーディネーターの発掘と育成

地域をコーディネートできる人材を発掘するとともにコーディネーターを継続的に育成する、研修や体験の場を用意する。

青山学院大学ヒューマン・イノベーションセンター 新目真紀

参考文献

厚生労働省 平成 24 年版労働経済の分析 2 章 貧困・格差の現状と分厚い中間層の復活に向けた課題

小原美紀、大竹文雄(2009)子どもの教育成果の決定要因、労働政策研究・研修機構 51(7)

清水憲志、名須川知子、横川和章(2013) 幼小中連携「おやじの会」の実践と効果 幼年児童教育研究 (25)

ホームスタート 日本のホームスタート活動集計

ホームページ http://www.homestartjapan.org/QISSsum/QISS20131231_Web.htm

4. 事業の成果と課題、今後の展開

平成 24 年度全国の児童相談所に対応した児童虐待相談件数 66,807 件で 23 年度より、888 件も増加したと厚労省が発表しています。その発生件数は急増しています。

当団体は、平成 21 年度に法人化し、ひきこもる若者への再チャレンジを応援する事業に、渋谷区や地域で中高生の居場所づくりをする団体（渋谷ファンイン）と連携して取り組んできました。引きこもり支援に関して厚生労働省は、平成 19 年度から 21 年度の厚生労働科学研究の研究成果（主任研究者斎藤万比古）を受けて、「地域連携ネットワークを構築し、訪問支援（アウトリーチ型支援）も用いながら、支援段階にあわせて家族や当事者への支援を実施」というガイドラインを出しています。

平成 23 年度、24 年度はひきこもる子ども・若者とその家庭への支援を社会福祉の事業として位置付け、渋谷区や地域の連携をつくりながら、厚労省のガイドラインで示された「地域連携ネットワーク」にのっとり、福祉医療機構の助成事業として実施してきました。

4-1 テーマ設定の理由

この間の様々な取り組みの中で、2つの大きな課題がありました。1つは、ひきこもる状態の子ども・若者が、過去に、虐待・暴力・いじめといった深刻な人権侵害を受けているということ、2つ目は、それゆえに対象者を把握することが困難であり引きこもりの状態を長引かせ、そのことがまたネグレクト等の新たな虐待を生んでいる傾向があります。その背景には、離婚の増加、経済的格差から教育や家庭教育まで多様な格差が生まれ、貧困の連鎖が起こっていること、また、地域のつながりはますます弱まり、家庭も、子ども・若者も、孤立の傾向が一層強まっていることが考えられました。そこで平成25年度は、児童虐待の急増の背景を受けて、子ども・若者の自己肯定感を育み自立を促すために、虐待発生を未然に防ぐこと、行政も、地域の団体も、企業や大学も、地域総ぐるみで多様な主体のネットワークで取り組むことをねらいとし「養育困難な子とその家庭へのネットワーク支援」というテーマを設定しました。

4-2 事業の成果と課題

事業の成果としては、ネットワークを形成するための実施体制をつくりモデル事業を実施したことにより、事業評価及び、事業の広がり、つながりが見られました。おもな成果は次の通りです。

- (1) 実行委員会の中に、弁護士（人権擁護委員） 研究者（若者の居場所） 区内大学関係者（青山学院） 行政関係者（東京都及び渋谷区）を置き、各分野からの事業評価を行いました。
- (2) ネットワーキングのために、中核コーディネーターと地域コーディネーターを置き、コーディネーターミーティングとして企画運営にチームで関わり、役割を分担し総合的にコーディネートを行いました。
- (3) ネットワーク会議により各団体の情報の共有ができました。
- (4) 渋谷区子ども家庭支援センター、渋谷区障害者支援センター、渋谷区子ども家庭部等、行政との連携の中で、事業の深まりが見えました。

- (5) 情報紙、「つむぐ つなぐ 渋谷ピアネット」を発行したことにより、新たな団体や民生委員協議会、人権擁護委員会等組織としての連携が生まれました。
- (6) 地域の人材を中心として、サロン活動ができるファシリテーターを養成したことにより、地域人材のスキルアップが図れました。
- (7) 企業の社会貢献活動の参入が有り、2つの寄付が生まれ、今後の継続が見込めます。

事業の課題としては、集合研修等の「集める・集まる」事業の調整は不十分でした。モデル事業では、当初予定していたアウトリーチ事業は地域の実情に合うよう工夫しました。おもな課題はあげます。

- (1) ネットワーク型事業は、各団体の自発性、主体性が基本となることから、事業の進捗状況に時間差、到達目標のレベル差が生まれ、情報共有が難しいこと。
- (2) 行政や、民生委員協議会や人権擁護委員会等組織としての連携は、行政主導で進むことが多いことから、組織より関わっている個人の参入をより求めている。
- (3) 養育困難な家庭からの電話、メールが、法人の常設電話だったため、相談しにくさがありました。また法人のHPでの広報にも課題が残りました。
- (4) 地域サロンを連携団体が行いましたが、集まる親は、「どうにかしよう」という問題意識があつてのことであり、必要な家庭には届かず、より一層の工夫を求めたい。
- (5) アウトリーチの対象となる孤立しがちな家庭の把握は、地域の団体だけでは難しく、まず知ってもらうために、各団体による「声かけ」を実施しました。

4-3 課題解決と今後の方向性

孤立しがちな家庭の把握とその対応のためには、行政を中心とした専門性の高いネットワークと、地域社会の顔の見えるネットワークの両者がうまく溶け合うことが必要です。次の課題を重点化し解決を図ります。

- (1) 平成 25 年度は中核 NPO と 7 団体がつながりました。ネットワーク団体を増やすことを踏まえて、中核 NPO のコーディネート力を更に高める必要があり、そのための人材育成に努めること。
- (2) 「虐待を起こさない、起こさせない」取り組みを周知させるために、地元企業(サッポロビールグループ)の社会貢献による寄付をもとに、区内公園に設置された自動販売機 37 機にステッカーを貼り、オレンジリボン普及のキャンペーンに参加すること。
- (3) ひきこもる若者が IT 企業(アクセンチュア)の社会貢献で IT 資格を取得し、e ラーニングによる被虐待児の学習支援をするため、IT 企業の協力で寄付サイトを運営すること。
- (4) 乳幼児期から概ね 20 代まで、成長段階に合わせて孤立しがちな家庭に届くアウトリーチの入り口として、「声かけ」を充実させること。

児童虐待や、引きこもりの子ども・若者を取り巻く家庭の状況は見えにくく、連鎖の鎖を断ち切るには多くの困難があります。25 年度実施した NPO を中核とし、行政がアドバイザーになり、地域の団体や企業が連携するこの仕組みを継続しながら、「地域連携ネットワーク」による課題の解決を目指していきます。

4-4 報告会で改めて確認できたこと

(1) 地域連携の“広がり”

地域連携ネットワークを司る柱として配置した地域コーディネーターは、地域とのかかわりも深く、その個人のもつ力量による広がりにも期待していました。3名の方々の個人力により、広がりが生まれたのは言うまでもありません。他方、モデル事業を地域連携した7団体で、多様な活動（アウトリーチ、居場所、地域サロン）を実施することで、それぞれの団体に所属するスタッフが活動を広げたのも確かです。こちらは事業実施によるネットワークの広がりでした。その結果、スタッフにコーディネート意識が高まり、地域コーディネーターといわば事業実施におけるコーディネーターの相乗効果がより一層現れていました。モデル事業を実施したことにより効果が生まれてのだと思います。

(2) ネットワークの広がりが生んだ「未然防止」「対応する力」

ネットワークがより広がることで、「未然予防」と「対応する力」が生まれました。だっこっこらぶの須田氏は、自らが子育て中のお母さんですが、「私自身が助けられている。知り合いが増えて、どこにいても（渋谷区内）見守られている」と報告会で述べました。いざと言うときに対応してくれる人がいる、安心、安全が地域に生まれていると感じました。またこれまでの接点が薄かった団体間でのコラボレーション（だっこっこらぶとオジオンの会、代官山ファンインと上原ファンイン）も生まれました。これも対応する力といってよいでしょう。

(3) モデル事業の積み重ねが生んだ活動の深まり

モデル事業のそれぞれの活動の回数を重ねていくことで、新たな発見を加味し、事業の内容、取り組みが改善され、徐々に洗練された事業になっていきました。特に、報告会で、事業評価者から「アウトリーチは難しい取り組みだったと思うが、今後支援者になる方にアドバイスはないか」との質問がありました。事業当初は、どのように対象者を見つけ、自宅まで訪問するのかと思っていましたが、地域サロンに集まった方に、「どう」とか、そこに集まった方々とよまやま話、子ども連れの親御さんには、子どもの話になったり、普段からしているなんとはない「声かけ」を、特定の場所以外でも心がければよいことに気づかされました。構えてしまいがちでしたが、余裕を持って緩い時間のなかで、些細なことにつながることが必要と感じました。その結果、手が届いていないところに手を届かせることができ、事業を繰り返し行うことで、活動に深まりが生まれました。

(4) 情報紙による活動の見える化

地域コーディネーターが中心となり、地域を掘り起こし、声かけをし、作成したのが情報紙でした。地域連携団体をはじめ、ご協力いただいた団体にも大変喜ばれました。地域に限らず、行政、企業にもその輪は広がり、つながりができました。それぞれの地道に実践してきた活動を、新たなテーマ「渋谷から虐待を起こさない、起こさせない」今回の助成事業での取り組みで、多くの人（地域、行政、企業）に知ってもらえる機会になったと思います。多くの方々から情報紙をほしいとお声かけいただいたのがその現れ（初版では足りず、増刷することになりました！）だと思いました。

(5) 中核NPOの役割の重要性

今回の助成事業を通じて、中核NPOの中間支援の機能が発揮されました。特に「人材」「資金」「仕組み」を地域連携団体に提供し、取り組むべき課題を示したことで、地域のもつ潜在的な力を引き出し、地域や行政にも手が及ばないところに入り込んでいける可能性が示されました。

おわりに

この1年、虐待を起こさない、起こさせないための取り組みを、以下の5つの事業を通して行ってきました。地域人材向け地域課題研修会の実施、ピアサポーター・ファシリテーター育成、報告会の開催、情報紙の発行、モデル事業の実施。これらの事業の内容については、この報告書にまとめられた通りです。

これらの事業は、以下のような意味をもつものでした。第一に、地域活動を担う人や団体の存在を、あらためて確認したことです。これらの事業は、地域社会を支える人的資源を掘り起こすことになりました。第二に、これらの事業に取り組んだ人びとが、1年間にわたる継続的な活動を通して、地域社会の暮らしの現状と課題への理解を共有するようになったことです。この機会に、住民が、地域社会の今後について、これまで以上に共に考えることになったといえるでしょう。

これらの事業によって参加者のあいだで明らかになったことは、第一に、現状の深刻さと問題のひろがりです。その背後には、経済的、文化的貧困と呼ばれる、家庭生活に限定されない社会的な問題が横たわっていることも確かめられました。第二に、これらの事業に取り組む人びとの自覚を促したことです。地域連携団体の担うべき役割についても、この事業の研修会などの機会を通して、当事者たちに、これまで以上に明確に意識されるようになったといえるでしょう。この点については、研修会における、「頼りは、住民の声」という行政の専門機関(渋谷区子ども家庭支援センター)のスタッフのメッセージを受け取ったことも付け加えておきたいと思います。第三に、日常的なはたらきかけの重要性です。地域サロンやまちなか(路上など)での取り組みで、問題を抱えて悩む保護者と、地域連携団体のメンバーとのあいだのやり取りが報告されました。この報告は、日常的なはたらきかけの重要性を教えてくれる、注目すべきものです。このような活動によって、住民が出会い、交流するきっかけが生まれます。今後は、声をかけるなどの日常的な活動を充実させる工夫が求められます。

この点について考えると、これまでも“声かけ運動”とか“あいさつ運動”とかいう類似の活動が全国的におこなわれてきました。しかし、その多くは、青少年健全育成を目的に大人が子どもや若者に声をかけるという一方通行の、限定された分野の活動や、行政機関が主導する、下手をすると上意下達になりかねない方法の活動です。それを、かたちだけではない、実のある内容にするには、少し年長の世話好きの住民が若い世代の保護者などに声をかけるといった日常卑近な世間話のレベルの、住民の横のつながりに目を向けた活動を工夫する必要があるでしょう。

さて、ここで少し視野をひろげてみると、虐待などの子ども・若者や家族の抱える問題への取り組みは、おのずと地域社会の暮らしについて考えることになります。ただ、そうはいっても、昔のような家業と地域の生産活動に支えられた地域共同体を取り戻そうとしても無理なことです。とすれば、地域社会を、相互扶助の精神で活動する団体がつながる網の目の全体(ネットワーク)という具合に定義し直して、地域社会の再生を目指す必要があるのではないのでしょうか。そこでは、地縁でつながる地域住民活動と、ミッション(使命、目的)で結び付く市民活動の連携が求められます。また、民生委員、保護司、青少年委員、人権擁護委員等が、必ずしも行政の枠組みにとらわれない、地域社会の暮らしの必要に応える活動へと歩み出すことが望まれます。

最後に、この報告書が、情報紙『つむぐ つなぐ 渋谷ピアネット』と共に、さまざまな住民(男性や高齢者を含む)の手に届いて利用されることを期待します。

発行者

特定非営利活動法人 ピアサポートネットしぶや

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 4-7-6 KTビル 201

TEL/FAX 03-6459-3848

E-mail info@peersupport.jp



この報告書は、地域連携活動支援事業「養育困難な子と家族のネットワーク支援事業」として、平成 25 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業により作成しました。

発行/2014 年 3 月 14 日